

満州

父母の恩は山より高く

海よりも深し

岩手県 小泉 周

昭和二十年八月十五日、玉音放送があるというので、隣組の組長さんの家集まるようにとのことで、長女良子を背負い、長男隆男と手をつないで伺いました。終戦のお話で、「これからの道は苦勞の多い道であろうけれども、心して生き抜くように」とのお言葉だけが私の心の中に深く残りました。

夜になって、隣に住んでいる訓練所の事務員さんが来られて、「明日、布団一組と必要品を持って日本に

帰るのだから」と言われ、「小泉さんはたくさん靴を持っておられたから、一組欲しい」ということでした。戸棚の中の天井にぶらさげている中から、これが良いというのを出してあげました。

主人は赤紙応召がきて、昭和二十年五月十三日に実弟敬雄大尉が戦死された東満州国境方面に、出征しました。ここは安東市前陽村である。ここから安東に出て新京を通り、ハルビンに行き、国際列車に乗り換えて東満州に行くのである。出征する主人を前陽村で見送るとき、訓練所の皆様も送ってくださいましたが、一番先に「お父ちゃん万歳」と両手をあげたのは隆男でした。それに続いて皆が万歳万歳と送ってくださいました。あまり急だったので主人とは詳しい話もできず、支度に追われて見送った後、机上を見たら、レタ

「パーパーに、一、夜泣きをする良子をななるべく背負わずに、昼間十分遊ばせて育てること。二から十まで書き連ねてありました。」

家では、ひよこを飼いなを隆男どり、良子どりと呼ぶことにしましたが、いつも家の前で遊んでいるので、呼ぶようなこともないまま大きくなり、完全に鳴けなけれども、格好を作り「ケッコウケッコウ」と鳴くようになりました。朝は、「おはよう！もう起きなさい」と鳴き、卵を産めば、「コケッコウ」と鳴くから、「隆男鳥は良子鳥をほめてやるんだよ」と、子供たちに話をしていました。

ほとんど雨の降らない安東です。燃料は粉石炭と粘土を混ぜて型に入れ練炭を作り、庭に転がして置けば一日で完全に乾燥される。安東でとれた白魚（十センチくらい）をみりんと醤油に一晩漬けて、一尾ずつえら穴に糸を通し吊して乾かす。軽く焼いて食べると誠においしいものです。慰問袋の中に、これを入れて戦地の主人に送ったのです。復員して来て、聞いたところ、慰問袋も洋服も届いてなかったそうです。

大陸は雨が少ない。一度も雪下駄を履いたり、高下駄を履いたことがない。むしろ部屋の中に濡らしたタオルをかけて置かないと乾燥しすぎてのどを悪くする。子供たちの生まれた吉林では、心してタオルをかけたものでした。午後五時になるとスチームが入り、音をたてる。あのころ（昭和十四年）としては、文化生活の始めころだと主人が言っていました。

非常時に備えて買っておいた大きな「すすき」一尾（当時八十円）分は塩漬けにしていたのを焼き、半紙に包み、更に新しいハンカチに包んでおく（今のようにビニールのない時代である）。塩がにじみだしてきしたが、子供たちの蛋白質の助けにと思いい食べさせたが、二人ともあきもせずよく食べた。お風呂をたてると子供たちを入れ、知り合いの大津さんもお子さんが小さいので、「後風呂でもよい」といったけれども入れてあげる。捨てて行くのも残念なので、コンデンスマイル缶をお土産にあげたら大津さんは喜んで帰られた（そんなこともあった）。終戦になったので、日本に近い安東から出征した人は帰って来ました。大津さん

の御主人も帰って来られ、「小泉さんは必ず帰られるから」と確信ある話をして励ましてくれた。大津さんの引揚げ先は大分県だから、「帰ったらパン屋でもして生活しよう」と話しておられたが、今どうしておられるかしら！

昭和二十年八月十五日午前十一時ごろ、武装解除前の兵隊さんが運転してトラック四台が村へ入ってきた。所長の太田さんが軍隊に願いに行つたそうである。これで安東市に出て内地に帰られるかと思つた。でもどんなことが起こるか分からない。子供らとはぐれないようにと、ただそれだけを思つた。最後の四台めに乗るようにと言われて乗ろうとしたら、三台めのトラックからコツコツと鶏の音がする。「お母ちゃん、おじちゃんも鶏を持っている。家のも連れて来ればよかつたのに」と泣かれた。私独りで何が起こるか分からないときに、鶏二羽も育てられない：これからどんな所に移動するか分からないから、日本に帰つたらまた買つてあげるから」と話した。乗つて見ると、小学校校長先生の奥様と子供さん四人、横井さんの奥様と赤ち

ゃん一人、私と子供二人、大東港建設局の方三人ばかりである。夫が出征して帰らない家族だけねと、だれかが言っている。そして着いた所が安東の朝鮮人の社宅であつた。社宅の人たちはいち早く祖国に帰り、空家になつていたので。日本に帰るなどとは嘘でした。

これから共同炊事が始まるというのです。まず食事は油いため、夜は雑魚寝です。時計も兵器と見なす。逃げるときは子供を泣かせてはいけない」と言われ、着のみ着のままズックを足から離さず、子供たちも疲れ切つて眠っている。夜中に起こされると夜警と称し、また軍の検閲と称し兵隊（八路軍）が来て回る。私の真つ赤な洗面道具の小物入れの前で離れない。財布とにらんだらしい。開けてみて納得して行つてしまった。ああ八路の兵隊に化けているんだと思つた。負けた国民の一場面である。ドーンドーンと大砲の音が遠くから聞こえる。

日本人、特に男性は「日本人であることが一目で分かるようにすること」という話が伝わってきた。人が殺されたが、朝鮮人がやったのか、日本人がやったの

か分からないというのが理由である。女は大体もんべ姿ですから、もんべの上衣の袖をとり、男も洋服の上に袖無し半纏はんぢんを着ることに成り、それからあまり殺された話は聞こえてこないが、日本人の市長格の方々が、八人も六道構で銃殺されたとか、されないとかうわさが聞こえてくる有様で不穏な状態は続きまして。共同炊事も長くは続かず、部屋割当があり、私たち三人は北側の四畳半に移った。台所道具もない、茶碗一つもない。持っているのは箸と弁当箱ぐらいのものでした。内地へ帰るといふ話であつたからと言つたので、今更どうにもならない。南側の六畳は鶏を持ってトラックに乗つた山田さん一家です。まず台所に行つてみた。我が家の上等の皿類茶碗類、各種の容器が並べられている。「あら、私の家の茶碗だわ」と思わず大声が出てしまつた。山田さんの奥さんが出て来た。「山田が前陽村の訓練所の二階に集めてあつたものの中から持つてきたと言ふのです。「それでは私にも使わせてネ」というわけで使わせてもらいました。七輪は朝鮮人の使つたのが捨てられてあつたから、ロスト

ルをそこらに落ちていた釘と粘土で修理して使わせてもらった。主人が出征して行つたから、皆、紙で一個ずつ丁寧に包んで、いつでも運び出せるように始末しておいたのが役立ち、偶然とは申しながら誠に有り難いことです。「神様・仏様は見えない所で見ていただくこと」と思つて、ただ感謝でいっぱいでした。それから二日後に大東港建設局のトラックが安東に行くといふことを聞いた。今まで住んでいた前陽村を通るわけです。所長に前陽村に行く許可をもらいに行つたら、行つてもいいが生命は保証しないといふことでした。「子供二人預かつてやるから、あなた一人で行つたらいいんじゃない？」と言つてくれる人、それに賛成する人もいたが、私は生きるも死ぬのも子供たちと一緒にと思ひ、良子を背負ひ隆男を連れて、わずかばかりのお菓子を持ちトラックの所へ行つたら、主人の教え子で家にも泊まりがけで遊びに来られた山崎様に乗つていられるのに驚き、そして喜んだ。「前陽村を通るかしら」「通りますよ」「治安はいいですか」「何にも変わりありません」「私、お力をお借りした

いです。乗せていただき、帰りもまた乗せて来て欲しいのです」と言うと、「大丈夫、面倒をみますから乗ってください」と言われ子供二人と乗った。何と有り難いことかと、今思い出して書いていても、字が見えなくなるほど有り難く涙が流れます。このことがあったからこそ、今の自分があると思う。天井裏の荷物七箱分と訓練所に集められた荷物の中から枕三個を持ってきた。胡瓜の味噌漬（一斗樽）は部屋の中に出ていたが、自分の車でもないので持つのはやめました。小豆の枕が体に良いというので作っておいのが、とんだ所で役立つことになりました。七箱分は口のあいだままです。衣類は私が広げる。満人がすかさず「三十円」と叫ぶ。途端にお金と着物の交換です。一万円の金ができた。みんな十円札です。主人の洋服は大きいので、ソ連兵が買っていくと、最高の値段、金八百円で売れました。

ソ連兵がトラックの上に乗って通る。隆男は遠くから見ている。「あの兵隊さんは赤い顔をしているね、お酒を飲んだの？」と聞く、「飲んではいないけれど

も、トラックの上は風が冷たいので、外人は色が白いから赤くなるのよ」というと、「そう」とうなずいてました。

日が経つにつれ、私どもの住宅にも「ポロ買います」と叫んで歩く満人が通るようになり、日本人の魚屋さんも来る。魚屋さんから少し魚を買ったときです。支払いしたら、「うちのお母さん、枕にいっぱいお金を入れているもの」と言つて両手でマルを作つて見せた。

「坊や、そんなことを人の前で言つて、取られるとお母さんが困るから、言わないんだよ」と静かに言ってくれたので、隆男も困った顔になったがすぐ分かったのか気を取り直し、良子も背中であなずいていた。その夜こたつに入り、懐中電灯をつけて金を数え、体につけることにした。モンペをはいていたから、目立たないように思えた。風呂はいつも山田さんのお父さんを先に入れてあげた。少々湿疹のある人だったので時々腕に包帯をしていた。もう一度風呂の温度を上昇させてから子供を入れたから、感染することはない。男の方々が夜警をして女子供を守ってくれました。

これも有り難いことでした。前に書いた八路軍は一種の泥棒であつたらしく、あれ以来は来ませんでした。新京に住んでおられた須藤様も、朝鮮經由で日本に帰ろうとして来たら帰れなくなり、安東に戻つて生活することに成り、時々奥様が尋ねて下さいました。

突然、明朝までに引越しをするようにと命令あり、そんなこととは知らず、この冬を越すのに薪や木炭を買いこんで、どうしたらよいものかと思つていたら、主人の大学時代の同級生（須藤・千葉・鎌田様）が荷車をひいて来て下さいました。それで次の家へ移動することができ、本当に感謝でいっぱいでした。

私も子供たちと遊んでばかりはおられないと、新京から転勤するときに、購入した明色水白粉、メンソレータムや眼薬、シツカロールを売り歩いていると、六十歳ぐらいの立派な婦子の満服を着た老人が、日本語を上手に話せる十五歳ぐらいの男の子を連れて歩いているのに出会い、男の子は突然「この子は立派だから連れて行つてもよいですか」と言う。あまり突然のことで返事に困つていると背負われている良子が「満人

は何だかんだとうるさいね」と早口で励ましてくれた。良子は足は少々遅かったが口は達者で、かつ早口であつたから、男の子はわからなかつたらしく、「男の子は一人だから連れて行かれては困ります」と言つたら、「よろしい」と行つてしまいました。隆男四歳十一カ月、良子二歳六カ月でした。今思い出しても有り難い子宝で、負けた国民の異国での一場面です。

安東市の市公署が八路軍の病院になつてゐるそうだと聞いて、薬剤師免許証を持つて行つた。院長さんは張さんという女性で、腰にピストルを下げていた。免許証を見せると二つ返事で「月給は支給できないが、弁当箱二つに御飯とお料理を入れて帰つてよろしい」と言う。そして洋服の上衣に赤十字と赤く書いてある腕章をくれて、「毎日洋服の上衣につけて歩くように」と言つてくれ、病院では皆が大事にしてくれました。一枚の免許証の有り難さをしみじみと感謝し、遠くにいる両親を拝みました。白衣の裁断は黒沢様の義姉様にお世話になり、天竺布を手で縫う。お互いに技術はこういう時に役立つものだと思はれた。須藤様の奥

様にご相談したら、「大丈夫子供はみてあげるから」と言われ、隣の森山様の奥様も大丈夫と言われました。毎日二人ともプラタナスの木陰で同じように、土いじりをして遊んでいました。子供心にも何か決心するものがあつたと思いました。雨の降らない安東は新京、吉林と違い暖かく助かりました。

病院の薬局の女の助手Mさんが、病院の大きなアカシアの枝先の花を天婦羅にしたら、とてもおいしかったと御馳走してくれました。私も一枚もらつて子供らに食べさせた。二人とも食べてくれた。日本に引き揚げてから四十三年になるが食べたことがない。忘れられない思い出として残っている。また看護婦のTさんは、トランプで主人がどこにいるか当ててあげると言うので占つてもらつたら、「安東から八時間ぐらいの所にいると出たから、きつと朝鮮におられるわ」と言つてくださる。帰国してから聞いてみれば、朝鮮で伐採をしていたという。当たるものだと感心した。

秋の日だまりで、子供たちの遊ぶのを見守つていたら、左腕に七つも時計をしている人を見た。主人と一

緒に現場で働いていた張さんである。「主人は？」「軍隊に行った。僕も御主人にお世話になつたから」と言つて、三千円をくださった。私はこれからどうなるか分からないし、お礼ができないからただけなかと断つたが、何としてもあげると言うので有り難くちようだいた。大福餅一個一円のとときである。「奥さん多々辛苦だね、多々謝々再会」と言つて別れた。今は北朝鮮か南朝鮮か分からないが、健康で幸せに過ごしておられることを遠くから祈るのみです。

ある日、病院に主人の職場の人が満人を連れて面会に来た。何事だろうと付いて行つたら空家に着いた。

「オキシドールやアスピリンは作れないか、作れるならば安東から奉天まで汽車を出すから」と言うのです。何しに来たのだろうかと思つてるうちに、子供二人ぐらいなら育てられると、相変わらず目をパチパチさせながら話している。変な話になつたなあと思つて聞いていたら、薬剤師の私を満人に売り金もうけをするつもり腹がよめた。戦争が始まり主人は出征、子供二人を連れて苦労している自分に、こんなことを考えて

いるのかと思つたら全く驚くばかりで、「オキシドールとかアスピリンは製剤であつて簡単に作れるものではない」ことを話し、「私仕事がありますので失礼します」と病院に戻つて仕事をすませ、子供たちの所へいつもより急ぎ帰りました。製剤というので思い出しましたが、「純樟脳」を持っていたので、それで凍傷軟膏の作り方を黒沢さんに話したので、おじい様、御主人様が一緒になつて作つて売られたのだと思う。私にも樟脳代として百五十円くださった。私が得た金はこれだけだったが有り難いことであつた。八路軍の病院薬局に残したノートはとても役立つたわけである。

これも薬学科四年生の夏休み、東北大学薬局で一カ月研修し、卒業後すぐ仙台簡易保険薬局に満三年勤務したお陰と感謝している。二十年ほど前になりますが、黒沢さんが石鳥谷のクラス会に来られた折にお会いして引揚げの話をし、お互いに涙を流して昔を語り全く苦労したものだ、再会を喜びあつたものです。同じ薬剤師でしたから懐かしい思い出でした。

病院はラコソウに移動するということになつたが、

私は昔の考えで、隆男は小泉家の長男の子として、日本の親もとに連れて帰らなければならぬから勤務も辞めようと決心して、日本に帰る準備を始めた。夢中で過ごした毎日であつたが皆様に助けられて三カ月ぐらい働いた。おやつをくださった森山様に時には昼食まで御馳走になつた。須藤様の奥様が来られると、子供たちも喜ぶ。奥様は「私ここに来ると一番気持ちがいいまるの」と言つてくださる。子供のない方でいらつしやるのに、と思う。お互いに心楽しいひとときで救われた。内地に帰つたら、是非「一の関に行くわ」と言つておられた奥様も、帰国してから病気で亡くなられた由、ついに再会はできず、今もなお、残念でならない思い出です。この年になれば、つらかつた思い出を共に語る友達があればよかつたのと思う。

安東の初冬の出来事はあまり思い出せない。ただ毎日が子供に振り回されることであつた。日詰の大志田さんが箱型でない櫛を隆男に造つてくださり、大声をあげてすべり、喜んだことを思い出した。「お母ちゃん今度日本に帰るときは、櫛も忘れないで持つて帰

ろうね」と言った。でも安東駅から奉天そして錦州と汽車で帰って来たので、小型の櫛はリュックにも入らないし、持ってこられなかつた。私たち三人がトラックの荷台に乗せてもらったのがやつとであつた。

そこはかとなく春めいてきて、草が伸びてきた。故郷の庭の草は雪の中に根は残っているが、満州の草や根は凍つて枯れてしまふ。

ようやく帰国の準備の洋服も出来上がりつつあり、帰国してもあまり不自由しないようにと準備したつもりであつた。時々集まりがあつて、日本は安定した状態でないという報告であつた。子供二人が風邪一つひかずに冬を越したことが、何よりもうれしかった。

昭和二十一年七月十九日午前三時、小高い所にある伝染病院の裏に集まれば、金五千円也（大人一人）で奉天に連れていってくれるそうだからと、大信田さんが来られた。終戦後、隣組に岩手県人の兵隊さんが入られたという話に、もし帰るときには子供が二人なので助けて欲しいと頼んでいたら、忘れずに誘ってくれた。「子供らが機嫌良く起きたら行くし、そうでない

ときは行かないから御了解くださるよう」と話した。

私が寝もやらず準備を始めたので、森山様御夫妻も眠らず手伝つてくれて、「長く歩くのは下駄がいいよ」と下駄をくださったり、足袋を履いた方が鼻緒ですれないからと足袋を出してくださつたり、本当に有り難いことでした。リュックサックも主人が富士登山に持つて行つたのは良くできていたが、小さなので大きい方に入るだけ詰めた。内地に行つても買わずに着せられるようにと。先ず良子を起こした。「日本に帰るかー！良子起きてよ」、寝ぼけもせずに「あら、日本に帰るの！」とにっこりした。支度をさせて食事を与えている間に隆男を起こす。「日本に帰るんだから起きて、午前三時までに裏の山に集まることになっているの」これまた機嫌良く起きてくれた。にっこりした良子の顔が忘れられない。満州であまりにっこり笑っていると物足らん子と見られるのだと言われたので、笑わないようになつた。大きなリュックサックを背負い、良子を前に抱きひもをかけ、左手に鍋、隆男の手を右手でひき、森山様ご夫妻に送られ、残した荷物の処分

を「須藤様とお二人で、話し合いをなさって、お使いください」と話して出発した。

私たち三人、チャムス医大生一人、兵隊さん方五人、通訳が奥様と二人、新潟のご夫婦二人、九州の親子三人、総勢十六人、知らない人ばかり、知っているのは大信田さんだけである。初めの道は小さい川にきれいな水が流れて、日本の道を歩いてピクニックでもしているような気分がした。だれかが「春の小川はさらさら流る……」と何度も歌い、それに和して皆で何度も歌い続けた。果てしなく続く高梁畑、とうもろこし畑、本当に広い畑、その畝の間を列を作って歩いていく。この列からそれたらもう日本には帰れないと思うと気が気でない。兵隊さんの行軍の早さである。話も上手にできない異国である。満州語も十分にできない。ついに良子は、秋田県の堀井さんをお願いして背負ってもらおう。料金は一日五十円である。夕方五時ごろまで歩き大きな百姓家に泊めてもらい、ささげの油いための塩味の食事代は、大人二人前を支払う。日々歩き疲れて百姓家に泊めてもらい、「日本人は多々困難だ

ね」と同情してくれる。途中で、青紫蘇の葉で包んだ塩味あんの餅を御馳走してくれた人があった。途中で三日も雨に降られて動けなくなった。満州も雨が降る所もあるんだと初めて知った。そういえば約十年間も生活した間に、畑に水をまいている光景を一度も見たことはなかった。ついに重いリュックの荷物は四百円で鍋ごと売ってしまった。荷物は軽くなり着のみ着のままの着たきりすずめになったが、子供たちの着替えだけは忘れずに持った。毎日大小の川に靴のまま入り、口をすすぎ水を飲み、濡れたまま歩くのである。「一歩あるけば一歩内地へ近くなる」と隆男を励ます言葉と思っていたら、今考えてみると自分を励ます言葉でもあった。

山に差し掛かった。五年生の時に習った分水嶺そのままのような所に着いた。途中で「隆男とても重いから、下りて歩いてくれ」と言って下ろし手をつないで歩いた。山の上にたくさんの木々で蝉が鳴いている。撫子、桔梗の花が咲いている。一本咲きで今の自分の心に力強く元氣をつけてくれた。だれかが湧水を見付

けて呼んでいる。本当にコンコンと音もなく山盛りに吹き出てわいている。その水の冷たいこと、今でも忘れられない生命の泉であった。山を下ってもう部落である。また農家の納屋にお世話になる。その夜はじやが芋とささげの油いため（塩味）、にらの卵とじ漬汁が出た。夜警の人もあやし、守ってやるからたくさんのお金が欲しいという。お札を芯にした白黒の木綿糸をほどこきにかかる。真つ暗闇の中でお金を身につけたころには空が明るくなってきた。荷物も何も取り上げられなかった。もう何百人の日本人がこの道を通り、奉天に向かつて行つたでしょうから、満人たちも慣れてきており、私たちは原っぱに連れて行かれて荷物を調べられ、欲しいもの、指輪、時計、重要書類さえも持つていかれ、トランクごと取られてしまった。隆男のバリカンもリュックの底に真綿に包んでいたのが、光るものでピストルかと殺気だつてとられてしまった。隆男も満人の案内人に背負ってもらうことにした。隆男もよく頑張ってくれたがこれから何日かかるか分からない不安もある。都合よく空馬車が来たので、千円

を払うから奉天へ近くなればよいと思ひ乗せてもらえば、安東省の境につれて来て五百グラムほどの高粱を与えられ、安東に戻る言われて今乗つて来た道を、靴の糸はきれて役立たずになり、仕方なく足袋はだして駅に戻つたのは、もう真つ暗闇で何も見えない午後八時を過ぎていた。

駅名は寒嶺という。駅の近くの原っぱに野宿することになった。子供らには私のズボンを良子にあわせて半分に切り足先からはかせ、上の方を隆男の半ズボンの下にはかせて、中型の木綿風呂敷をかけて、皆動きもせずに眠つてしまった。朝になり足袋を脱いで足の裏を見たら、一面の水泡である。見なければよかったと思つたがもう遅い。用意して持っていた新しいズックをはいた。また明日歩くのであれば大変だと思つたが子供たちでなかつたことに感謝して、いつの間にか夢の中に入っていました。眼が覚めたら、寒嶺の駅から奉天まで汽車に乗せてくれる由、心の底から足のためにも感謝した。午前十一時ごろ来た客車に乗り、夕方五時ごろ奉天駅に着いた。奉天国際劇場の国際収容

所に皆と一緒に収容された。

時に昭和二十一年八月三十日であった。安東を出発してから四十三日目でした。九月十五日奉天出發、無蓋車に乗せられ、おまけに雨が降り錦州に向かつて動いている。周囲は板もついていない、鎖さえも付いていない周囲を男の人たちが手をつないで落ちないように守ってくれている。事故が起こらなかったことを感謝しました。男の方々も歩いて来られて疲れているのに、他人の女、子供たちを守ってくれて、本当にお礼のしようもない。皆様ご幸福で生きておられるよう、ただただ祈るのみである。

錦州の収容所で、資格を証明する免許証などが見つかれば、その班、団体は帰国できなくなり、明日検問があるとのことだった。「第三〇五二号」「みんなできるくわになっていつかにほんにこうね」と薬剤師免許証の番号（暗号）を覚えて、主人の弟の透少佐の写真や遺言書を炊事釜の焚き口に行って焼いた。その間だれも来ないで助かった。遺言には隆男は技術将校になるようにと書いてあった。三人で見守るうちに

焼けていった。「こうして焼いたことを覚えているんだよ」と静かに話した。子供らは黙ってうなずいた。

昭和二十一年九月十六日、ころ島出發、日本の船（富国丸）に乗った。難民であるから四階も階段を下りて船底が私たちの寝る場所であり、休む場所である。航海長の中村様、事務関係の菅原様がおいでくださった、お二人とも関中出身で、校医をしていた私の父のことも良く知っていると話してくださったので、本当に力強く嬉しくなりました。夢にも想像しなかったことでした。また船中で前に座っている人から思いがけなく樺太で医師をしている一番上の兄、三神時多郎の名を聞いた。

船中では麦御飯にさつま芋の葉の入ったものでした。おかずは一つだに思い出されぬ。牛乳も配給になりました。コレラ保菌者が出たので、三週間佐世保上陸が延期され、沖につながれて待つことになった。上陸はすぐできないが、日本の港の灯を眺めて近く上陸できる喜びは、何とも表現ができず、経験した者のみか知る感激であり喜びでした。あふれ出る涙は何ともし

ようがない。我が子が上陸できても神戸あたりで生命が持たなかつたら、また遅れてしまうので、中村航海長を通じて船医に診察してもらったら、「北海道まで持つかどうか危ないが、心臓が丈夫だから一の関までならば、りんごの汁だけでも大丈夫」と言われた。上陸するときは、何人かずつ上陸用舟艇に乗せられた。

東佐世保で汽車に乗り、汽車は三人がけである。東海道線は全く夢の中でした。品川駅で省線に乗り換えるとき、電車とホームの間が空いたので、ズツクのまま足を入れたが運良く脱げずに助かりました。東北本線では、仙台を過ぎたら人が減ってきて、子供らも腰かけを利用できるようになった。仙台に勤務していたころを思い出した。前のおじさんがおにぎりを食べ始めた。隆男も良子も黙ってじっと見ている。何も言わない。私には持ちあわせのお菓子もない。見るなとも言えない。紛らわせる玩具もない。おじさんが二人におにぎりを分けてくれた。二人はにこっと笑い、元氣いっぱい「ありがとう」と言っておいしそうに御馳走になった。私も厚くお礼をのべた。御住所でも何っ

ておけばよかったと悔やまれて仕方がない。ありがとうございました。

三神の実家にも小泉家から連絡があったとみえて、ホームに降りてみたら自転車をもともとまで乗り入れて、鉄道医である父が提灯をつけて待っていてくれた。後で聞けば昨日も一日中下りホームに出て待っていてくれた由でした。ホームで隆男に「ここが日本のお家がある駅だから、もう汽車は終わりですよ」と言った途端に一步も歩けなくなり、ホームからおじいさんの自転車に乗せられ、おじいさんは車曳きになってしまっただ！ また、一の関駅に杏子さんと秀子さんが迎えに来てくれていた。嬉し涙も出ない。「姉さん、坊主頭でなくてよかったね。〇〇さんは坊主頭で帰郷したぞうだ」と話していた。

小泉家の父は六十二歳、母は五十九歳、三神家の父は七十四歳、母は六十五歳、私は三十二歳でした。皆、元氣で嬉しく近ごろにない喜びを味わいました。

良子が弱っているので、父に診察してもらいに行ったら、「こんなに弱った子供を、よく死なせないで帰

って来たなあ」と感慨深く言ってくれました。そしてブドウ糖やビタミン剤を注射してもらい、毎日続けましたら、日増しに良くなってきました。

小泉の父は「私も兵隊だったからよく分かる。苦勞したなあ」と話してくれました。

昭和二十一年七月十九日午前三時、隆男四歳と十カ月、良子二歳と五カ月を連れて満州の安東を出発してから、七十四日を要して東佐世保に上陸した。「長い間、御苦勞様でした」と書かれた看板を見たとき、ひとりで嬉し涙がこみあげてきました。

【執筆者の横顔】

小泉周さんは岩手県一ノ関市の近郷に代々名医として高評の三神医院の三女として生まれ育ち、東邦大学薬学科卒業の薬剤師である。

周さんの主人、小泉一郎氏は日本大学工学部卒業。縁あって両者結ばれ、仙台市及び盛岡市に居住したが、岩手県庁土木部職員に任用となって人生のスタートを切って走った。

もとより学生時代から外地雄飛型だった小泉氏は、岩手県知事や本省に希望をのべて政府推薦で、昭和十三年満州国政府官吏に任用となり、吉林市土木部を皮切りに、交通部に転じ、安東にある交通部職員訓練所教官になって、学卒の若い職員に教鞭をとった。

ところが昭和十九年応召となり、たちまち終戦となったので、帰宅するつもりでいたところ、ソ連軍の捕虜となりシベリヤに抑留され、毎日が生と死の隣り合わせの三年間、危険きわまる環境を運よく乗り越えて、昭和二十二年に故郷の一ノ関に引き揚げてこられたのである。

周さんは、夫が応召され、次にはシベリヤ抑留された三年間、主人が生きて帰れる保障のない生活のまま、万難万障を乗り越えて愛児を抱き、切歯扼腕し正に半死半生で故郷にたどり着いた。

幸いにも周さんの父親が名医師なので、子供を看病してもらい、生還できた。母親としてその感激は今思いうす度ごとに、号泣するのである。ともあれ周さんは、二度と主人一郎氏と会えないと思っていたのに、

くしくも前後して故郷に引き揚げてこられた。

夫の針に妻は糸のごとく、身の存在は遠く離ればなれになっていても、目に見えざる糸は切れない夫婦の真実の愛情があつた。

そして周さんの洋々たる大海のごとく、包容力に富んだ教養を生かされた人生觀に徹してこられた功德であらう。

(拙引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助)

一 少年の記憶

山形県 會 田 銳一郎

敗戦後の国民の生活はつらく惨めなものではあつたが、私の住んでいた旧満州国四平市は比較的恵まれた方で、北滿と異なり、ソ連軍の戦車や銃火器にじゅうりんされることも無かつたし、敗戦の屈辱で直に受ける婦女暴行も、私自身は目撃したことは無かつた。ま

た、ソ連や八路軍の兵隊に時計や布団など強奪はされたが、逃避行で幾多の生命を落とした開拓団の方々の悲劇もなく、家族全員で無事引き揚げる事ができた。

ソ連軍の進駐

終戦後、しばらくはまだ日本の軍隊が武装したまま四平市公署辺りに駐屯しており、街は割合静かで満人の野菜売りなども普通に商売しているような状態で、戦争に負けたという実感が乏しかった。ただ日本人のこれから先の生活がどうなるのか、どのような扱いを受けるのか分からなかつたし、いずれにしても相当長時間の食糧や、冬期に備えての燃料は真つ先に確保しておかなければならなかつた。

そのとき父は満鉄社員として北滿の扎蘭屯じらん屯にいるはずだったが全く音信不通、生死不明だし、姉二人、私、妹、弟二人の六人の子供を抱え、終戦後やむを得ず同居させてもらった友達の日夫人（御主人はやはり北滿方面の満鉄社員で未帰還だった）の杜宅で留守を預かつていた母の心労は並大抵ではなかつたらう。ともかく日夫人と組んで着物や貴金属など粟あわや高粱こうりやんに換える